

## 《Seiryō's Global Commons: An Uncommon Experience》

### 一貫性と柔軟性

中村 優希<sup>†</sup>

私は結構適当に生きているタイプだった。これといった夢もなかったので、何かへ向かって進路をとることがばかばかしくさえ思っていた。そんな私は金沢星稜大学人文学部へ入ってよかった。そしてこれからもよい経験をするだろうと思っている。そう思うわけを少し話そうと思う。

この文章で、学部をPRしなさいと言われてはいないので述べるが、一年次は英語漬けである。週12コマの授業のうち、10コマは英語である。そして、12月から1月にかけて一年生は続々と留学へ出発する。そういう流れにとりあえずは沿うことになる。そして今、私は英語漬けの段階にいる。この段階にいて、いろいろ思うことがある。

一つ目は座学という意味での勉強では超えることのできない言語の壁だ。人文学部の教員には外国出身の方が多い。そういった先生方と話す機会が増えたことはとても喜ばしいことである。しかし、そもその思考プロセスが違うのだろうか、授業内のみならず普段の会話の中でさえも、文法とかそういう次元じゃない言語間での差異を感じる。

二つ目は、日本人気質だ。日本人と考え方や行動が違う人々と身近に接することで、比較文化的なものに触れる機会が増えた。さらに、外国人と日本人を問わず、大学にはこれまでに接したことの無いタイプの人がいる。そして一番感じるのが、一年の日本人学生がフジツボの

ように固まってグループを作っていることだ。それと対照的に留学から帰ってきた二年生のoutgoingな人との接し方からも強い印象を受けた。その二つの日本人にはなかなか見られない能力というか性格こそ海外留学の目的・効果なのだろう。

生真面目なのは日本人の誇るべき特徴である。しかし、その生真面目さを生かす機会を得るには、海外留学の効果ともいえるべき、性格の変化が必要なかもしれない。それも海外に長く滞在したものにはかわからないものなのかもしれないが、少なくともプラスに働いていることは、二年生の背中を見れば一目瞭然だ。

ためらいもなく、つらつらと思うことを書いてきたが、このように述べてくると、心にとめておきたいことが見えてきた。それは、“言語の壁を越えなくとも、壁にあけた小さな穴から、互いを理解しようとする、そんな姿もまたロマンチックである。”ということだ。やはり、自分を自文化の枠から完璧に外すことはほぼ不可能に近く、それを顕著に表す言語はなおさらである。しかし、留学後の上級生の背中を見て、思うことがあり、そして届きそうで届かない、平安時代に男たちが垣間見た気持ちがわかるようなロマンチックなシチュエーション。最初に言った通り、私はいまだ適当に生きている。しかし、そういう楽天的な見方でこういう考えができるなら誇れるものだろう。変えられる、もしくは変えると新たなものが見えるもの

<sup>†</sup> Kanazawa Seiryō University, Faculty of Humanities, Department of Intercultural Studies

を変えることができ、変わらないことに価値が見いだせるものをそのまま生かせる、そんな環境・雰囲気・カリキュラムがこの学部にはある。私はこの学部に入ってよかった。